

# 新々々々々・良く利用され なお美しい矢作川の創造をめざして

— 田中 蕃さんと応用生態工学 —

Towards the creation of beautiful Yahagi River even hardly utilized X

新見 幾男

Ikuo NIMI

## 天然アユ調査会の創立メンバー

故田中蕃さんは、第3セクター時代の豊田市矢作川研究所（1994.7～2003.3）の創立メンバーであり、矢作川天然アユ調査会（1996～）の創立メンバーでもあった。

93年4月頃から豊田市・枝下用水土地改良区・矢作川漁業協同組合の3団体で矢作川研究所設立の準備が始まり、同年中には3団体側は、在野の実力派の昆虫研究者であり矢作川のアユの釣人でもあった田中蕃さんに、主任研究員就任を要請した。田中さんも研究所設立準備に参加し、翌94年4月の設立予定に合せ同年3月に民間会社を退職した。定年より1年早い59歳での早期・自主退職だった。

しかし、豊田市矢作川研究所のスタートは市役所側の都合で94年7月まで延期された。スタート後も研究所の事務所が定まらなかった。主任研究員の待遇も定年退職後の事務職のパート程度の扱いだっただけ。市役所は第3セクターの組織運営についてまったく無知だったし、昆虫の専門研究員を単なる趣味人程度に思っていたふしがある。田中さんが公務員組織に不信をつのらせ、不愉快な思いをされた時期であるが、田中さんは矢作川研究所を創るという理想主義を大事にしてもらった。

それから2年後の1996年、豊田市矢作川研究所の研究活動を民間側から支援する市民団体・矢作川天然アユ調査会が設立された。今は正会員30人・準会員40人程の会で、矢作川と三河湾の天然アユ調査ではコンサルタント会社をしのぐ実力をもっているが、スタート当初は右の写真のメンバーを中心に10数人の同好会的な

組織だった。

矢作川天然アユ調査会は、矢作川の釣人たちが自ら川の科学・魚の科学をしようとして作った会だが、それが10年の歳月の積み重ねを経て、矢作川研究所系の本物の調査団体に成長した。全国的に希有な成功例として注目されるようになった。

矢作川の腕の良い釣人であり、実力派の自然研究者であった田中さんは、同調査会の最古参メンバーであり、体調をくずした最後の1年間を除いて、春夏秋冬のほとんどの調査活動に参加した。田中さんは矢作川の人々に愛されていたし、科学者として信用も得ていた。田中さんの存在が身近にあったことで、矢作川の釣人たちは川の科学、魚の科学をする姿勢を自然に学んだ。

田中さんの研究者としての専門は蝶や蛾であつたが、植物や魚類もよく勉強しておられた。土木工学にも関心をもち、矢作川の土木技術者たちと交流しておられた。

矢作川天然アユ調査会の草創の頃には「応用生態工学」という学問はまだ知られていなかったが、博物学者



写真1 矢作川天然アユ調査会の草創期の頃のメンバー。前列左から3人目が田中蕃さん。撮影日、場所はわからない。



写真2 豊田市街地の矢作川で天然アユ流下仔魚の24時間調査をする田中蕃さん(左)と外狩久男さん。97年10月18日の夜明け。

的存在だった田中さんは、矢作川において応用生態工学の先駆的な仕事をされたと思う。調査会の勉強の席などで、こんなことを話された。「私は生物の研究者だが、土木技術の大切さはよく理解しているつもりだ。河川の土木技術者が魚や昆虫のことを勉強してくれたら、それだけで矢作川はよくなりますよ」。

あとで述べるが、田中さんはダム直下流の矢作川において、当時の愛知県豊田土木事務所の協力を得て大規模な「砂利投入実験」を初めて行ない、水生昆虫や魚の生息環境改善効果を自分で調査しておられた。1997年頃のことだったと思う。その実験効果を豊田土木事務所でも土木技術者たちに説明しておられた。別の席だったと思うが、天然アユの産卵床の改善や魚道構造の改良についても提案しておられた。

今の応用生態工学の主流は、土木技術者が生物学の勉強をはじめているという段階だと思うが、当時の田中蕃さんは逆に、生物研究者の立場から土木技術に接近し、「土木技術の改良による生物生息環境の改善」を提案しておられた。

1995年のことだったが、当時の建設省豊橋工事事務所うめやちのぶおの梅谷内信夫所長が豊田市主催の河川環境講演会で、土木技術者論について記念講演した。田中さんと一緒に聴講した記憶だ。今でいうところの応用生態工学に一脈通じる話であった。

講師の梅谷内所長は「これからの河川行政は治水・利水・環境のバランスが大切だ。治水・利水は土木技術者の右の脳で判断できるが、環境には住民参加で対応するしかない」と強調された。作家の司馬遼太郎が日本土

木学会創立80周年講演会(94年)で述べた土木技術者論を引用して講演を結んだ。

司馬遼太郎の話は次のように紹介された。「土木というものは、本来人民に幸福を与えるためのものである。土木はほかの学問や技術と違い、国家とか行政の中心に座ってしまうので、技術を追求するのみでは現実生きてこない」「土木は社会という人間の体のような組織の中心にあるものだから、環境の問題を考えないと成立しない学問である。人体と同じ生命体である社会の中の外科的手術を施すものだから、土木をやる人は社会学とか、文学的デリカシーのある教養の塊のような

人でなければならない」「そうでないと、社会の味方だったこの学問が社会の敵となるような、非常にきわどい時代にさしかかっている」。

以上が梅谷内所長の講演で引用された司馬遼太郎の「土木技術者論」だが、田中蕃さんの持論も、この土木技術論に通じるところがあったように思う。田中さんは大変な読書家で、文学的な教養人であった。応用生態工学という新しい学問が矢作川で語られるようになる前の時期に、田中さんは自分の文学的教養と博物学的教養によって、専門の生物学と土木工学を一体的に理解することができたのではないか。

さて、私が忘れていて、思い出せないことがある。田中さんは鬼籍の人であり、もう確かめることはできなくなってしまった。

矢作川の近自然工事の元祖的存在である「<sup>ふっそ</sup>古嵐水辺公園」の護岸工事に、田中蕃さんはどう関わって来られたのだろうか。愛知県豊田土木事務所が古嵐水辺公園工事を実施したのは1992年2月～93年5月であり、松武義聰所長の時代である。1994年7月の豊田市矢作川研究所設立より2年程前に着工し、その後1年余で一応の完成を見た。

そもそも蝶の研究者である田中蕃さんと、矢作川漁協の河川環境担当理事だった私は、どこでいつ出会ったのか。第3セクターの豊田市矢作川研究所は、私が矢作川漁協から非常勤の事務局長として出向し、『原色日本蝶類生態図鑑Ⅰ～Ⅳ』の共著者として広く知られていた田中蕃さんが定年退職後の再雇用あつかいで主任研究員として雇用され、スタートを切った。研究所組織が少しず



写真3 愛知県豊田土木事務所が近自然型護岸工事で古巣水辺公園をつかった。ここは田中蕃さんのアユ釣り場であり、田中さんの昆虫研究の調査フィールドだった（1993.3.9）。



写真4 完成直前の古巣水辺公園の工事風景（1993.2.6）。



写真5 古巣水辺公園は矢作川筏下り大会のスタート地点になった（1993.5.9）。



写真6 地元主催で古巣水辺公園竣工感謝祭。右端は加藤正一豊田市長，西日本科学技術研究所長の福留脩文さんが挨拶しておられる（1993.5.7）。

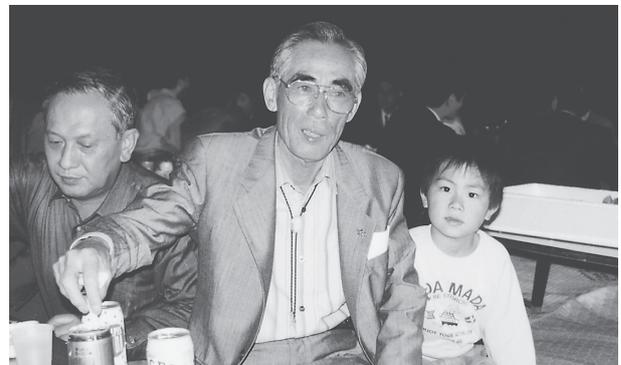


写真7 竣工感謝祭で，村山秀夫さん（中央）と田中蕃さん（左端）（1993.5.7）。

つ整備され、若い研究員が主任研究員になると、田中さんは総括研究員になったが、非常勤出向の事務局長と再雇用あつかいの主任・総括研究員という、私と田中さんの関係は、スタートから9年後の2003年4月に第3セクター研究所が市営研究所へ組織変更されるまで続いた。市営化の直前に田中さんは総括研究員を退任し、研究顧問になった。

第3セクターの民間側団体だった枝下用土地改良区と矢作川漁協の2団体は、豊田市営研究所の「運営協議会」のメンバーになり、民間側の意見を市営研究所に反映していくことになった。こうして第3セクター機能継承の形はととのったが、市営研究所は元気をいくぶん弱めた。今後の地方自治体への市民参画・民主化の過程で解決しなければならない課題が数多く残されている。

話を本論に戻すが、1994年7月の第3セクター研究所のスタート以前から、田中さんの矢作川でのアユの釣場は古巣水辺公園付近だった。豊田市青木町の田中さんの自宅から車でほんの5分程の位置だ。そこで田中さんと私は初めて会い、多分は1992年頃に、第3セクターの矢作川研究所設立構想を語り、研究員として設立に参加していただきたいとお願いしたはずで

ある。しかし、肝腎な1992年頃の私と田中さんの会話の記憶が私の頭からまったく欠落している。

青年期の頃から私は自分の記憶力の障害を自覚していた。書くことと会話を繰り返すことで記憶力の悪さを補ってきたように思うが、そのことを私は田中さんに話してなかったようだ。もう研究所の市営化が日程にのぼっていた頃の酒の席で、「田中さんは何歳で研究所に来られたの



写真8 足助町大河原（現豊田市大河原町）の矢作川で豊田市矢作川研究所が砂利投入実験（県許可）（1995.6.6）。



写真9 主任研究員の田中蕃さん（左）が砂利投入の河川環境改善効果をNHK記者らに説明している（1995.6.6）。

か・・・」と聞いたことがある。田中さんは「早く来てくれというから（民間の塗料研究開発の仕事）定年より1年早く辞めて来ましたよ。知らなかったんですか」と憤然として言われた。

古巣水辺公園の近自然型護岸工事は、1991年秋の豊田市派遣のヨーロッパ近自然河川工法調査団が帰国した直後に、同調査団に参加した愛知県豊田土木事務所の

土木技術者が設計し、翌92年2月着工した。そして93年5月7日、古巣地区（豊田市扶桑町自治区）と矢作川漁協が地元主催で、愛知県と豊田市に感謝の意思を表わすための竣工式・パーティを現場の水辺で盛大に開催した（写真6・7）。その時に近自然公園の地元管理団体として古巣水辺公園愛護会が誕生した。

それがのちに矢作川研究所系の「矢作川川会議」の設立につながっていくのだが、これは矢作川研究所設立（1994年）の1年前のことだ。この近自然工事への田中蕃さんの関わりが明らかでなかったが、最近、竣工パーティに出席している田中さんの姿をスナップ写真の中で見つけた。地元の釣人として古巣側から招待されたのか、すでに主任研究員就任が内定していて、漁協側がご案内したのかも知れない。

前述のように、これより3年あとの1997年頃から田中

さんは、ここ古巣水辺公園前（越戸ダム直下流）と阿摺ダム直下流で、大規模な砂利投入実験を企画・実施された。古巣水辺公園は田中さんの応用工学的発想の事業展開の実験場になっていった。

田中さんは猿投山麓の豊田市猿投町の里山では、地元のギフチョウ復活運動を支援するため、地元集落で講演会を開いたり山中で現場指導をしておられた。これも田中さんの身体に病気の気配がまったく見られなかった1997年頃からのことだったと思う。

矢作川漁業協同組合9代目組合長，豊田市矢作川研究所運営協議会幹事：  
〒471-0025 豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F